

平成7年5月30日発行

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆう と 櫻貝 と

海光る わが 故里

第 7 2 号

内容	鵠沼の想出	塚原 秋廣
	岸田麗子の思い出（講演会）	逸見 千鶴子
	江ノ島の地質と史跡	小林 政夫

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保12年・1841）で、“くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。〔藤沢市史資料・第29集より〕

鵠沼の想出

塚原 秋廣（故人）

明治の頃

私の鵠沼についての一番古い想出は、まだ妹の福子の生まれない時分にさかのぼる。だから、明治42、3年の頃であろう。まだ、電気のきていない時分で、夜になるとランプを灯し、寝る時は隣の部屋に行灯がともっていた。そして、外に出る時や手洗い行く時は雪洞（ぼんぼり）を使用していた。

日露戦争後鵠沼海岸の松林の中に、父が木肌葺の粗末な家を建てたそうで、それまでは夏になると大磯あたりへ行っていたということを母から聞いた。その当時は神奈川県高座郡鵠沼村字堀川といって家の前西側は辻堂迄、一面の水田で、門前から富士山や大山がよく眺められた。

作今の混雑した鵠沼とはとても似つかないさびしい静寂な所であって波の音がよく聞こえてきた。たしか、明治43年の大台風の後であらう。母に手を引かれて、海岸の方まで一面に水につかった田畑を見に行ったことを覚えている。

私の幼稚園時代の夏休みに鵠沼に来ていて、明治天皇の崩御を聞かされたことは印象に残っている。その当時は東京から鵠沼へ行くには、まだ東京駅が出来ていない時分で、現在の汐留貨物駅のところにあった新橋駅から汽車に乗った。客車も横から各座席にはいる旧式な木造車であった。大森、川崎、鶴見等と止まって横浜駅に着く。この横浜駅は今の桜木町あたりで、そこからスイッチバックして戸塚、大船と止まって2時間くらいかかって藤沢駅に着き、人力車で家迄行ったと思う。江ノ島電車はあったが、小田急はまだなく、江ノ電鵠沼駅から家迄歩くと30分以上かった。

大正時代

明治天皇の崩御によって時代は大正と変わった。私は大正2年に小学校に入学した。そして毎年夏休みには鵠沼に来て、海水浴をした。最初の頃は海にはいるの

がこわくて、豊さんという漁師の人が天気の日は大体毎日迎えに来てくれて、いっしょに海に行き、手を取って海にはいり波が来ると引き上げてくれ、泳ぎ方を教えてもらった。

姉達も一しょに行ったが、その当時は女子の海水着は、白いスカートのついた木綿服であって白い帽子をかぶっていた。その当時は海も砂浜もきれいで海水浴の人出もなく泳ぎつかれると砂浜に穴を掘ったり甲羅干をしたりして肌をやくのを自慢していた。砂浜の海辺には八丁櫓の漁船が沢山並んでいて地引き網の盛んな頃であった。朝早く父達につれられて海岸に散歩に行き、知り合いの漁師の地引き網を引かせてもらったことも度々ある。

家から海迄は10町（1000米）以上もあったであろう、途中には地元の農家が数件と別荘が数件位しかなく寂しい松林の道を通して、田んぼの間を抜けるとすぐ先に引地川が流れている。舟板で作った手摺りもない仮橋を渡ると一面の砂丘で波打ち際迄はまだ数百米位あった。この道を家から海迄裸足で行ったものだ。まだ、海岸のドライブウェイなどはなく、目の前左側には緑の江の島が大きく眺められ、右側には烏帽子岩が見え遙か西方には富士山が雄大な姿を見せていた。波際を辻堂の方まで歩いて行くと砂浜はもっと広くなり海軍の陸戦隊の演習場があった。

このあたりは、春になると防風（刺身のつまになる草）や松露が出るので、それを取りに行ったことがある。

尼寺

家の近く海岸寄りに京都黄檗派の尼寺があった。母が仏教の厚い信心家であり、鵜沼に來ていると暇があったので、この尼さんと懇意になり、私は子供の頃よくつれられてお参りに行き、本堂の美しい阿弥陀如来の本尊の前で、木魚を打って念仏を唱えさせられたことを覚えている。お寺の前庭には蓮池があって夏になると美しい花が咲いていた。

このお寺は大正12年 9月の関東大震災で倒壊して、現在の本鵜沼の位置に移って

立派な本堂が建っている。ここも当初は畑の中の一軒屋であったが、今では周囲を人家で囲まれている。

田舎の生活

鵠沼に於ける生活は主として夏のせいもあつたので、都会ばなれした簡素なものであった。広い松林の中に建てられた家には、東側に数間離れたところに井戸があり、砂地であったので水面迄は2米位の深さであったが、きれいなつめたい水が湧いていた。それを”はねつるべ”（撥ね釣瓶）で汲んでいた。風呂場迄は木樋があって送水したが、それを汲むのが面白く且運動になった。台所へは手桶に汲んで持ちこんでそれをひしゃく（柄杓）で使っていた。今から考えると家庭用電気器具などのまだ無い時代で本当に原始的だった。海水浴から帰ると塩からくなっているので、水着のままこの井戸の水を井戸端で頭からかぶった。井戸の両側には桃畑があって、赤く熟した水蜜桃を朝起きるとすぐ木からもぎ取って食べたがとてもおいしかった。

近所の農家からは新鮮な野菜がとどけられ西瓜やサツマ芋はことにうまかった。魚は地引でとれたのを漁夫が持って来てくれて、鯨などは真新しいのをすぐ自分で手作りで刺身にして食べた。

屋敷内は一面の松林であったので風が吹くと松葉が地面に落ちる。それを熊手で掻き集めて所々に積んで置いて、天日で自然に乾いた落ち葉をかまどで焚いて御飯を炊いたものだ。この御飯は薪で炊いたものよりも火加減が自由にできてよく炊き上っておいしかった。このかまどでは薩摩芋を入れて、松葉を焚いて焼芋を作っておやつの代わりに食べるのが大へんおいしかった。

江の島

腰越に叔父の別荘があって先方も夏休みには従兄妹達が東京から来ているので、時々泊まりがけで遊びに行った。鵠沼から腰越迄は一里以上もあつたが殆ど一軒も家がない。海岸の松林の間の細い一本道を歩いて行って、片瀬川にかかった山本橋

という木橋を渡って龍口寺（日連上人受難の地）の前を通ると腰越はもう間近であった。近くに当時の平民宰相といわれた原敬の別邸があった。腰越、片瀬の海でもよく従兄達につれられて海水浴をした。江の島が近いので何度も弁天様にお詣りにつれて行っていただいた。江の島に行くのは片瀬から木の仮橋を渡るのであるが、1銭か2銭の渡橋料をとられた。この橋は台風がある度によく流された。橋の下は浅瀬であって潮が引くと砂が出るので、大きくなってからは歩いて渡ったこともある。最近の江の島は知らないが、その当時は土産物屋が軒を並べていて、さざえの壺焼きなどを食べさせる茶店も並んでいて情緒があった。稚児ヶ淵あたりの景色は真に美しく、海水もすき透っていて本当に真白き富士ヶ嶺緑の江の島であった。

高学年になってからは波の静かな日に、わざわざ鵜沼から出かけて片瀬で貸ボートに乗り、稚児ヶ淵迄泳ぎに行ったこともあった。片瀬の龍口寺にも度々お詣りした門前の上州屋の片瀬饅頭はうまいのでよく食べた。

大山登山

中学1年の夏休みに第一高等学校の学生だった知り合いの兄さんが、鵜沼の家に泊まりがけで遊びに来ていて、その人に連れられて大山登山をしたことがある。朝早く家を出て平塚迄汽車で行き、そこから当時はまだバスや自動車などの殆どない時代だったので、4里の道を伊勢原か秦野迄歩いて、石段の坂道を登って阿布利神社に参詣してから裏山を頂上迄登った。帰路も同じ道を平塚まで歩いて夜遅く家に帰って来た。夏の暑い晴天の日に往復10里以上歩いたので随分疲れた。これが私が山らしい山へ登った最初の経験だった。中学4年の時箱根方面への修学旅行の帰途、丁度その時母が保養のため鵜沼に滞在していたので、藤沢で途中下車して立ち寄ったこともある。5年の夏休みに学校の有志で富士登山をした。この時は新宿から中央線で石和迄行き、そこから10里の道を歩いて御坂峠を越え河口湖で泊まり吉田口から登って八合目で泊まり、翌日頂上で御来光を拝んだ。その日のうちに須走口へ下山して御殿場迄歩き、帰途は藤沢で一行と別れて鵜沼へもどり、富士登山

の汗と疲れを鵠沼の海で流したこともある。

関東大震災

中学5年の夏休みも終って9月1日から2学期が始まるのであるが、たしか9月1日が土曜日であるので3日の月曜日から登校しようと思って、引き続き鵠沼に滞在していた。昼食を母と幾子姉と3人で食べていると、ゴーンといううなりがしたかと思った途端にどすんと家が放り上げられたような感じがして、同時にぐらぐらと家が動いて地震だと気付いた時はもう遅かった。母と姉と3人つぶされた家の中に押しつぶされてしまった。

余震のたびに屋根の重みでしまって来て段々動けなくなる。もう生きた心地はない。母はお念仏をとこなえている。幸い年増の女中が土地の者であったので、地震と同時に外へ飛び出したので、すぐ近所の農家の人に来てもらって屋根を破って助け出してもらった。どの位の時間がたったか覚えていないが、九死に一生を得たというのは本当にこのことであらう。本当によく助かったものだとも今でもゾッとして想い出す。この時から私の人生に対する観念が変わった。東京の家もこの大震災による火災で壊滅して境遇も変わり世相にも大変化が起こった。

幸い私は右足と左耳に軽い怪我をしただけで歩くことも出来た。姉は全然怪我はなかったが、母は右の上膊に骨折をして内出血をしていたので、直ちに近所のかかりつけの先生に来ていただいて応急の手当をした。大正12年、その当時はまだラジオもなく通報網も発達していなかった所以、この大地震の様子が皆目わからない。電気が切れて夜になると真暗だ。大きな余震が度々やって来るし本当にこわかったが、何分放心したような精神状態になっていたのだろう。こわさがピンと来なかった。子供の頃、安政大地震の話とその地震を本当に体験した家に居たばあやから聞かされていたことが本当にやって来たと思った。津波の恐れがあるかも知れないという情報が流れて、家の松山には数世帯の人が避難して来ていた。家の小さな離家は屋根が軽いのでつぶれなかったが、地震がこわいのでその夜は裏の松林に蚊帳を

吊って夜露を防いで寝た。時々余震があり本当に不安の一夜であった。翌日になると多少情報がいり、東京、横浜には大火災が発生しているとか、地震で江の島が海中に陥没したとか聞かされた。然し幸い津波もなく江の島の実在は目で見えてきた人もあるのでこの点は安心だった。この当時は鵠沼はまだ豊漁村であったので食糧の心配はなかった。暑い時だったので喉がかわくので西瓜をよく食べた。家の井戸は井戸側は地震による砂層の転位で曲がったが、水には変化なく飲料水には困らなかった。2,3 日して藤沢から親戚の人が見舞いに来てくれてうれしかったが、東京の家の様子は皆目わからない。情報を総合すると多分浅草の家は焼けたであろう。家の者は何処へ避難したであろうか心配でならない。骨折した母は藤沢の接骨院に入院した。私も東京へ連絡に行かなくてはならないのだが、怪我をした右足がまだしびれているのと、鉄道が全く不通であるらしいので気はあせるがどうにもならなかった。10日ばかりたつて朝鮮人事件など色々の情報がいり、東京の家の様子も大体わかって来たので、東京に行くことにした。朝早く握り飯を持って藤沢からレールの上を大船迄歩き、そこから無蓋貨車の汽車に乗って、何時間かかかって横浜を通りやつと東京迄たどりつき、小石川駕籠町にいる姉の家に着いたのは夕方であった。

そこで父を始め兄弟達の無事な姿を見て本当にうれしかった。東京の火災からの避難の話を聞き、また鵠沼の様子を語って互いに話合った。2,3 日姉の家に厄介になってから鵠沼で怪我をした母の様子が心配なので、父と一しょに再び不便な列車に乗って鵠沼にもどった。鵠沼ではつぶれた家を再び建て直して元通りにすることにしたので、震災で焼失した三中が牛込の四中の校舎を借りて授業が始まる迄、家の再建の仕事の手伝いやその監督などをした。この関東大震災によって中川の家は全家財を焼失し財政的にも苦しくなったので、私は上級の学校へ通学できる境遇ではなくなったが、父母兄姉達の慈愛により、それに私自身も何としても大学を出て身を立てなければならぬと決心して冬休みには建て直った粗末な鵠沼の家で、高

等学校入学の受験勉強にはげんだ。今でも十五夜の雲一つない澄んだ月を見るとあの震災直後電気もつかない鵜沼で眺めたあの十五夜の月とあの頃の気持ちが想いだされる。

おわり

〔註〕この文章は、会員の「西 忠保」氏から提供していただいたものです。

作者は西さんの母方の祖父、中川清太郎の五男、故塚原秋広さんです。



— 1923年8月の見出し —
1958.6.11 岸田麻子

麗子と鵠沼 — 岸田劉生、鵠沼時代 —

編 集 部

砂丘に松山、「松原遠く 消ゆるところ 白帆の影は浮かぶ……」という唱歌を耳にする度ごとに、いつも鵠沼あたりの海辺を思いうかべることのできた日、その時代も遠くなりました。今は人工的に造り直され、海浜にはサーファー姿が目立つ鵠沼ですが、かつてはこの温暖な気候と、美しい風景に魅せられ、多くの人達が訪れた地でありました。文学、絵画に関しても鵠沼を舞台としたものが多く残されています。

「鵠沼を語る会」では、あの何とも愛らしい微笑をたたえた麗子、時には能面のような表情を見せたり、妖気漂う笑みを浮かべる麗子、等々一連の「麗子像」の大部分が鵠沼で描かれたことを思い、今回「麗子と鵠沼」というテーマで、岸田劉生の鵠沼時代の一端をうかがい知る時を持ちました。（それは平成6年10月29日に鵠沼公民館においてでした。）

劉生の鵠沼での生活は、大正6年2月から大正12年9月までで、関東大震災のため家が半壊して、離れるまでの約6年半でした。この間、目に入れても痛くない程可愛がっていた麗子をモデルに、松風が聞こえ、麦畑の広がる鵠沼の風景を背景としてキャンバスに描き、作品の上でもこの鵠沼での日々は、劉生の一番充実した時であったとされています。

そして今回は、麗子と一緒に遊び、共にモデルをつとめた、かつての村娘”お松”の「川戸まつさん」（藤沢在住）にもおいでいただきました。また、弟さんが麗子やお松と遊んでいたことを通して、”岸田家の方々との思い出”を「逸見千鶴子さん」にもお話ししていただきました。千鶴子さんは「劉生絵日記」（後述）に出てくる”正ちゃん”の姉上にあたります。

さらに「麗子」のお嬢さんにあたる「岸田夏子さん」（画家・東京在住）からは数々の資料をお送りいただきましたので、会場に展示するなどして、ここに皆様の

御好意を一つにまとめ、往時の鵠沼の姿を想う場といたしました。

(以上、野口ゆくえ記)

なお、当時の劉生の住んでいた鵠沼の地図および、記録に残っている主な別荘を指摘した鵠沼一帯の地図を末尾に綴じ込みました。

～～ 岸田劉生 略歴 ～～

- 明治24年（1891） 6月23日銀座で生まれる
- 38年（1905） 14才 父母が相ついで死去
- 38年（1906） 15才 洗礼を受ける
- 41年（1908） 17才 画家になることを決心。黒田清輝の教えをうける
- 大正 2年（1913） 22才 小林藁と結婚
- 3年（1914） 23才 長女麗子誕生
- 5年（1916） 25才 肺結核と診断される
- 6年（1917） 26才 鵠沼海岸に転居
2/23 「佐藤別荘」に住む
6/24 「松本別荘」に転居
- 7年（1918） 27才 この夏から麗子と於松をモデルにした制作が始まる
- 8年（1919） 28才 妹照子が病後の療養のため同居
- 9年（1920） 29才 元旦から絵入りの日記を書き始め、大正14年まで続く
- 12年（1923） 32才 関東大震災のため鵠沼の家が半壊し名古屋に避難する
10/3 京都に落ち着く
- 14年（1926） 35才 鎌倉長谷に転居 長男鶴之助誕生
- 昭和 4年（1929） 38才 死去

鵠沼での作品

麗子像・20数点 村娘之図 林檎三個 初夏の小路 卓上静物図
麦二三寸 窓外夏景 鵠沼風景 石垣ある道 画家の妻 或る道
支那服着たる妹照子像 晩夏午後 新緑小閑 朝の道スケッチ
など

「岸田麗子さんからの手紙」

逸見千鶴さんは、かつてこの劉生の家（松本別荘の中の借家）の斜め前に現在もお住まいです。

昭和29年、麗子さんが鶴沼を訪れた際、逸見宅にも立ち寄られたその時の御礼をかねた書状です。

昭和二十九年十月二十日

一年中で一番空の美しい秋だと申しますのに今年はどんよりとくもった日が多く、
気候も大変お寒いやうでございます。その後千鶴子様はじめ皆様お元気でいらっし
やいませうか。先日はおハガキをいただきながら、この所ちよつと身近に忙しいこ
とが重なり、はじめてお訪ね致しましてあのような厚いおもてなしを頂きましたお
礼さへ申しあげてをりませんことを、深くおわび申し上げます。

あの日は私にとりまして一生忘れることの出来ない日となりました。あまりに感
動が強く、むしろ苦しいほどでございました。泣いても泣いてもなほ美しい思い出
に満ちた古郷が私にもあったことをあの日ほどはっきり知った日はございませんで
した。震災で鶴沼を去ってから鶴沼をおとすれましたのは、あの日はかりではござ
いませんでしたが、年のせいということもござるせうが、人の世の浪風が荒ければ
荒いほど、人の心は美しいものを求めるものなのでござるませう。

島田愛子様にお目にかかり、千鶴子様にお目にかかり、愛子さまの御目と下ぶく
れの頬の昔のままなこと、千鶴子様の眉とお目もとが、弟様にそっくりでいらっし
やることなどが、どんなにおなつかしく存じ上げられたこととござるませう。こん
な世の中に住んで、あの日のやうな日が私にあらうとは思ってもみないこととござ
いました。皆様のお幸せさうな御様子を拝見して、本当にうれしく存じました。

幸田様のこと、本当にありがたうございます。幸田様は現代の随筆家の中で私の
最も尊敬する方ですので千鶴子様の御線でお目にかかれることは何よりの喜びとご
ざります。丁度私も十一月三日まで都合が悪ふでござりますので、その後の土曜日
と、日曜の午後をのぞきましたいつでも結構とござります。ただ十一月十三、十四
の両日は差しつかえますので、その他の御二方の御都合がおよろしい時何卒おつれ
下さいませ。主人も思いがけず色々の方にお目にかかれ、又日記の中の風物にふれ
ることができましたことを心から喜び、御親切におもてなし頂いたり、御案内頂い
たことなど、厚く御礼申し上げてくれるようにと申してをります。本当にありがた
うござりました。まだ御目もし申し上げてをりませんが御主人様にも何卒くれぐれ
もよろしく御伝へ下さいますよう御願ひ申し上げます。

まづは御礼方々御返事まで。

かしこ

岸田麗子

十月二十日

逸見千鶴子様

はじめの（鶴沼での）家は海に近くて、広い敷地には松林があつたりした。佐藤という人の別荘だったとみえ、土地の人達は佐藤別荘と呼んでいた。私は表門も玄関もまるで覚えていない。私が知っているのは庭と縁側と便所と、階段と二階と階段の下の小部屋と、台所と裏の空地と別荘番の人が住んでいた小さな家と、松原と小径と小さな裏門とである。

父は二階で寝ていた。二階からは晴れた日には富士山がよく見えた。どういふ偶然なのか私が粗相した朝は曇っていて富士山がみえない。「ホラ、今日もデコちゃんおネシヨしたから、富士さんが隠れてしまったよ」父がそういって私をからかう。

佐藤別荘に越して間もなく、やがて「村娘於松之像」としてたくさんの父の絵のモデルになったお松ちゃんのお母さんが、台所の手伝いに来てくれた。

お松ちゃんの家は佐藤別荘のすぐ近くだった。お父さんは虎さんといって漁師を業としている人だったが、お酒が好きでお松ちゃんのお母さんはそのため苦勞が多かった。お母さんがうちへ御飯たきに来る時、お松ちゃんも一緒に来て私達は友達になった。

父の体はめきめき元気になっていった。佐藤別荘は絵を描くには南向きで光線の具合が悪く、それにせまいので、鶴沼のなかで手頃な家をさがすことになった。そして鶴沼でたった一軒しかないという西洋館のついた家がみつかり、六月にそこへ越すことになった。それが松本別荘だった。

松本別荘というのは、正面の小高い松林のなかに大きな邸宅があり、門の前からずっと道ができていて、その両側の松林のなかに点々と貸別荘があり、ひょうたん池があつたりたいこ橋があつたり築山があつたりしてなかなか凝っていた。真中の太い道の入口に、大きな二本の門柱があり、そこに「松本別荘」と筆太に書いた表札が掛かっていた。

入口の門柱のすぐ右側の家が私達の家だった。松本別荘のなかの一番入口の家で電車の停留所の方から来る道に面したところは、土が高く盛り上がっており、そこに松が生えていて自然の垣根になっていた。

松本別荘の大きな門柱をはいると両側は竹垣になっていて、所々に点在する家々の小ぢんまりした門があつたりした。そのじぶんはだいたい避暑に来る人とか、胸を患っている人が療養に来る土地がらだったので、どの家も三間か四間位の手頃な家のなかで、私達一家がすんだ家だけが母家の他に洋館の二階建の一棟がついていたのだ。

それにしても私達は小さいのによくモデルをしたものだと思う。私はとに角として、まるで境遇もちがい育ち方もちがう家庭の子供が、どうしていやがりもせず、当然のことのようにモデル台の上に座ったのだろうか。

これは今度四十年ぶりでお松ちゃん（現川戸武史夫人）に会うことができ、はじめてお松ちゃんから聞いたことだが、当時の田舎では、絵描きさん、というだけでもめずらしいのに、そのモデルに選ばれていることは、お松ちゃんの家でも鼻の高いことだった。近所のうちではお松ちゃんをうらやましがって、うちの子供もぜひ描いてやってほしいと父の所へ頼みに来たおかみさんもあり、その時父が、絵のモデルというものは誰でもいいというわけにはいかないもので、絵になる顔とまらない顔があるから、という意味のことをいって断ったので、そばでそれを聞いていたお松ちゃんは、内心、**「どんなもんだい。」**と大いに嬉しかったという。

それに加えて父は巧みに私達二人を競争させた。**「さあ今度はデコちゃんの番だよ、お松ちゃんとおつちが描きいいかな」**お松ちゃんの絵を仕上げて、次に私の絵にかかるとき、よく父はこんなことを言った。私達は、**「むづかしい。」**と言われることを一番不名誉に思っていた。二人共、**「やさしい。」**うまくいった。言われようと思つて一生懸命モデルをした。

父が十代からはじまって代々木時代を通り、仕事の上で一つの完成期を迎えた鶴沼時代というものは、短い父の生涯中一番長い年月の時代であり、従つて最も多くの仕事をし、やがて次のさらに新しい美の世界の発見へ進もうとし、すでに東洋的美の世界にはいつていた大切な、かつ華やかな時代である。

明治末から大正期頃の鵠沼南部



※ 鵠沼の主な別荘 注. この佐藤別荘の跡地は現在駐車場になり、松本

別荘の小さい松山は、つい先頃削られてしまい

ました。

○ 佐藤別荘

● 松本別荘

吾子のモデルの想出



岸 田 泰

麗子が始めてモデルになりましたのは二才の春、二才を改して居ります。それまでも主人はスケッチを多くして居りましたので、イチャイチャ描いては居りましたが油絵具で固らしく描きましたのはこれが最初で御座いました。私が描いて一つ所を見せるのに苦心致しました。よく動き出すので側で橋真雄さんがあやしげめにしてもらいました。一時間ばかりかかりましたろうか、後ろを夜の星のかがやいているバックにしまして今も宅に保存してあります。

麗子のモデル台に坐つて本式のモデルを致しましたのは五才の夏からで御座います。いじらしい位、おとなしく坐つて居りました。それ迄も道端に遊んでいますと其まき一寸じつとして云つて風景の中にはいった事も時々ありましたし、今にお父様のモデルになるという事は何時からともなく麗子の頭の中にしみ込んでいた事でも

ありましたので、そのせいで通分あるとは存じましたが実によいモデルになりましたので主人もこれなら描けると申しまして大喜びで御座いました。

一体主人はモデルに愛を感じないと描く氣になれない、買^いでしたので大ていお友達の方とか家族の者とかの外はあまり肖像を描いて居りません。一度モデル女をたのんだ事がありました、汚ない汚ない云つて二日許りで断つて仕舞いました。その変り愛する人でしたら幾枚描いても中々厭きると云う事がなく大ていの場合モデルになる人の方が又かと思つてウンザリする位次々と一人を何枚も描いて居りました。

そんなで麗子も五つの夏から十二才迄は、ずっとモデルを致して居りました。丁度その頃、鶴沼にお百姓の娘でお松という麗子に二

つ上の子が居て母親が時々私方の用事と手伝いに来るので一所に来ては麗子と遊んで居ましたのでこの地もいつとはなくモデルのコツを覚え麗子と前後してモデル台に立つようになり、二人は競争して着められるのを得意に、忠実なモデルになりました。モデルと云うものはそれを仕たものでないと苦しまが分りました。じつとしてある一処を見つめて居るといふ事はなかなか容易な事では御座います。ましてよいお天気でお友達の遊んでいる所やお茶の間にお母様やおば様たちの笑声が聞えたりする時じつとモデル台に居るといふ事は小児にとって可成りつらい事だと存じます。麗子とお母様は



（大正十三年の作品 京都にて）

それを本心に一度もいやな顔をした事はなくどんなに面白そうに遊んでいても主人がサアモデルだよと一言申しましたとすぐ画室に飛んで行きます。この事は私は今でも不思議に思う位で御座います。

す。そうして一枚でも数の多い方をお互に誇り合ったりして居りました。そのうち段々麗子は父の画に面白さを感じて来たようでも御座いました。そうして父の感じをすぐさとり思いのままのポーズをすぐ自分でこしらえました。父と二人きりで画室に入って居る時間が長くなつて二人は益々親密な親子になりました。時にはからかい過ぎて麗子が大泣きする事も御座いました。

展覧会で麗子像が売約されました時丁度会場に来合せた長与善郎さんの奥さんが麗子ちゃんはお親のマネがじりじりありませんねと申されました。そんな汚ないものは捨てたくてと本気になつて云いわけしたので大泣きした事が御座いました。

私共の家庭は三人三様の家庭で決して子共三様の家庭では御座いません。何より大切なのは主人の気分をこわさない事で主人の良しと見る事は家族全体が良しと思ひ主人の悪いといふ事は又理屈なしに家族全体が悪いとするのでした。この事は主人の御機嫌を取ると云うのではなく実際そう思ひ込むので御座いました。そうして知らぬ間に私共の趣味が高尚になり心が深くなつて行くのを後ではつきり覚えるので御座います。生れた時からこう云う家庭に育ちました麗子は、何より父にほめられるといふ事が一番の手がらだったので御座います。

主人は画を描いて居ます時休みの時間はよく、書斎で西洋の画家の画を見るか日本の昔の人の画を出して見て居ます。又時にはオルガンを弾いて大声に賛美歌を唱つて居る事も御座いました。麗子はモデルをして居ます時はいつもお休みの時も父と一緒に本を見たり唱つたりして閑に居りました。そのうち段々画がうまくなりまし

で、たしか七才の時かにおもちゃを油画で板寸に描き非常に父を喜ばせました。

主人の好みで十二才まで前がみを下げて居りまして、自分では何の気もつかなかったのがふとお友達に笑われて氣にしなければならず、誰もこの年まで前がみを下げて居る方はいないと云い出しました。丁度その時診察に見えた御医者様が、麗子さんはお父様の趣味で前がみを下げて居るのでか支那人みたいですねと申されましたので、いやになり十三才のお正月から前がみをあげました。この年から鎌倉に住むようになり女学生になりました。丁度おかばさんが少しのびた処で前がみの毛も中途半端で形がつかず自然モデルもお休みにになりました。

それ迄ずっとモデルをして来ました。中には随分形の苦しいものもあり中腰になって立つて居るのなどは麗子は随分つらそうで御座いました。でもよく父の氣持を察し、油が乗って来て知らず知らず時間を長く描いて居ります時など、よくじつとこうえくモデルを仕つけて居りますので、側から注意してお休みにする事も度々御座いました。

子供のモデルには麗子とお松のいる事で主人は幸福そうで御座いました。画が出来そくて機嫌のわるい時や頭がわるくて仕事の出来ない日など麗子はどうして御機嫌がわるいかという事がよくわかり同情と理解を持って居りました。そうして麗子の氣転で御機嫌のなおる事もよくありました。

おかっぱさんをのびし始めてからは早く長くなって日本髪に結えるようになるのを父と娘とで楽しみにして居りました。十五の暮か

ら楽しみにしきつて居りました唐人髻に結い又モデルになりました。この頃は一層父のモデルになる事に誇りと楽しみを持つようになり自分の顔をどんなに色どられてゆくかという事に心から興味を感じて居りました。

ほんとうに麗子は主人に取つて又とないよいモデルで御座いました。このお正月は結婚に結うつもりで手がらを買ったなりぞ致しまして父の帰宅を待ち兼ねて居たので御座いました。どんな些細なものの一つを求めますにも、これは描いたら面白いと父に誉められたい父を喜ばしたい、そうして趣味の良い子だと喜ばれたいという事で今迄来たので御座います。

主人は只自分によりよき仕事をして自分を高め活かして行け、いい、自分を正当に愛し活かす事によつて家庭の運命を愛し活かす事になるのだという意味の事を日記に記してありますが、それは本当にこうで御座いました。

これからは母と娘の心の中に、色濃く一層色濃く生きて居ります面影を父の娘らしい良い婦人になってほしく又なりたく思つて居ります。

この原稿は岸田劉生の没した翌昭和五年雑誌「いとし児」の五月号に発表されたものである。劉生没してまだ半年も経っていない。ちなみに、文中「このお正月は結婚を結うつもりで」の正月とは、この原稿が書かれた年の正月のことで、劉生は暮の十二月二十日、ついにこの正月を迎えずに没したのである。

母のこと

劉生を夫に選んだひと

岸田 麗子

今日まで私はいろいろの機会に、父について書くことをたのまれたり、話すことをたのまれたりしてきた。長い間の私の念願だった父の仕事とその生涯について書くことも、やっと一冊の本として近い中にさる出版社から「父岸田劉生」と題して世に出るはこびとなったが、母のことを書くことをたのまれたのは、今度がはじめてであった。私はいつか母のことも書きたいと思っていた。

老いなき心

麗子 坐像（一九一九年八月 岸田劉生作）

私の母は岸田劉生を夫に選んだひとだけあって、世の常の「女」や「妻」や「母」とは少しずちがつている。そして私はそのことを面白と思う。母も歳をとり、私も生前の父の歳をはるかに越した今、





父の好きな母の写真 (20歳の頃)

老人に対する憐憫とか、苦勞を重ねて来た未亡人とかいう母でなく、自分の仕事と、自分の人生観と、老いない心を持った一人の人間として母に對することが出来るのを、実にうれしいことに思っている。

母は神田生れの江戸っ子である。その点父が銀座生れで、二人共東京の下町っ子である。父の父は岡山県から志を抱いて江戸に出て、後に明治の十大先覚者といわれるようになった岸田吟香であり、母の父は名を小林良四郎といい、新潟県の士族であったが、明治維新に東京に出て、学習院で晩年は慶応義塾で、漢学の教授をしていたひとである。

母は明治二十五年(一八九二年)二月一日、小林良四郎の三女として生れ、葵(しげる)と名付けられた。母の母は名をしんといい、若い頃は小町娘といわれたきれいなひとであったそうだ。私が物心ついた頃には、もうすっかり白髪の老人であったが、それでも鶴のように

やせて背の高い品のよい老人であった。

長姉は府立第一高等女学校(現白鷺高校)を経て、津田塾に学び、次姉と母は府立第二高等女学校(現竹早高校)を出た。

十六才の頃、仏教にひかれ、参禅したこともあるということを、何かの折の思い出話に母が話したことがある。作文や絵を描くことが好きな少女であった母は、十七才の時籙木清方氏の門に入り、本格的に日本画の勉強をはじめた。

劉生との出会い

一九一二年の十月と、翌年三月と二回開催された若い洋画家達の展覽会「フユザン会」は、当時の画壇に強い関心を持たせた。新聞には批評がのり、大家といわれる人々も皆展覽会をみに来た。内田魯庵氏の展覽会評が新聞に出て、フユザン会を子供あつかいし、岸田劉生の作のあるものをセザンヌにそっくりだと批評したので、父は憤然と反駁文を発表し、その文章は皮肉たっぷりに相手をやったものだった。

フユザン会のうわさは、日本画の、しかも美人画の塾生である母達の耳にもきこえ、母は或る日塾の友達をさそって、フユザン会の会場へ行ってみた。そして多くの新しい絵の中でひと際母の心を打った作品があった。それは会場に並べられた十四点の岸田劉生の作品であった。

母は父の住所を知らなかったので、フユザン会の事務所宛に手紙を出した。するとやがて返事があり、父と母はフユザン会事務所へ

はじめて話し合うことができた。その時の話題が「ゴッホとゴーガンのちがいに ついて」だったという。

当時父はゴッホに深く傾倒し、ゴッホとゴーガンについての当時の父の考えや感想が、ノートにたくさん書き残されている。クリスチャンであり、恋愛すら罪惡視せずにいらなかった父であり、一方画家としての自分の使命感を、内から強く感じ出してきていた父と、父の絵をみてから、自分が絵を描くことが無意味に思えてきたという母とが、どんな風にして話したか、わずかに頬の凹い、つぶらな瞳の初々しい母の写真と、紺がすりの着物の肩から絵の具箱をぶら下げた純朴な父の写真とから想像することしかできないが、それは清らかな青春の情熱あふれる会見であったにちがいないと思う。

そうして父と母の間は恋愛に発展し、一九一三年の七月一日結婚した。そして翌年の四月には私が生れた。

劉生のために

父が亡くなった時、雑誌アトリエが「岸田劉生追悼記念号」を出し、そこに父の友人その他の方々が追悼文を寄せられたが、椿貞雄氏の文のなかに、当時の父と母の様子がよくでている所があるので、それを少し引用させて頂くことにする。

「……その頃彼はやせていた。十二貫何百ぐらいであつたろう。(晩年は二十一貫ぐらいあった)両頬の肉は落ち深い皺があり、眼は眼鏡の奥に鋭く光り(強度の近視眼のためジット人を見る眼玉がすわっていた。しかし、これは近視からばかりのためではなかった。……)唇

はいつもビクビク瘰癧れんを起していたし(前歯は入歯だったのでそれを気にしてしょっちゅう唇を動かしていた)そして、しょっちゅう貧乏ゆるぎをし、両手で両膝をなでるのでそこだけビカビカ光っていた。そして時々顔を真赤にして、あの高調子のほがらかな笑い声で笑ったが、終生忘れる事はできないだろう。しかし性急(せうきゅう)ちで疳癪(かんりやく)持ちで、虎のように吠え、道を歩けば垣や電信柱をステッキでひっぱたいいた。それは実に息苦(いせ)るしく、焦々(せうせう)したものであった。しかし、仕事の生長と共に年々落付きを増し、晩年は自由闊達飄逸(ひょういつ)円滑(えんくわく)になった。

……」

「……其頃は未だ静物を画題にしなかった頃だったから、雨が降る事を一番恐れていた。雨が降りたりすると疳癪(かんりやく)を起す度も多く『しげる、棒で空の雲をおっぱらってしまえ』などと本気になって怒鳴っていた。彼は何者かに呪われている気がし、物をたたき付けたりわめいたりしていた。奥さんが大変だろうにと、すぐ隣りの家に住んでいた僕は、物のこわれる音や怒鳴り声を聞く度に、ヒヤヒヤしながら同情したり彼の気持ちに同感したものだ。……」

父の仕事を深く理解し、よい仕事ができると貧しいなかから赤飯をたいて祝う母であつた。又はじめてバトロロンらしいバトロロンがつき、その人が自分の肖像画を父達の思っていたよりずっと高く買ってくれた時、父はその金全部を絵具とカンバスにかえた。その時の父の喜びを、当惑しながらも母は自分達の喜びとして喜んだ。

私がモデル台に坐るたびに、絞りの着物の皺がちがつてしまつて、父が疳癪(かんりやく)をおこしそうになると、母が父の絵をみながら皺をすっきり

整える、父は安心して又絵が描けた。

椿の花を描いている時、花がボタリと落ちてしまう。母はそれを針で上手にもと通り枝につけて、父の仕事がうまくゆくように協力するのだった。父は非常に強い性格の持ち主だった半面、又非常に弱い面があったが、その弱い面では母にたより切っていた感じである。それは他人には全くわからぬことであったが、残されている父の母宛のたくさんの手紙や日記が、よくそのことを語っている。長い人生のうちには夫婦の上にもいろんなことがある。しかし一番底ではかたく結ばれて動かぬものがあつた父と母であつたことを、私は今度父のことを書くに当って、父の書いたものを調べて本当に知ることができた。

茶道に生きる

母は今、江戸千家滑白流、六世川上滑白という名前を持っている。これは母が自力で切り開いた道から得たものである。父の存命中習った茶の湯を、父の歿後本気になって勉強した母は、流派がちがっても、尊敬する師があればそこへ教えを乞いに出かけ、茶道のため



父の三十六歳の誕生日の記念に。父母と私と弟（一九二七年六月二十三日）

の得がたい文献があると聞けば、道を遠しとせずどこまでも訪ねてそれを自分のものとするという風で、茶の湯の道は母の生涯の仕事となり生きがいとなった。

母は岸田劉生の妻であると同時に私と弟の母であり、同時に一人の人間として、父にも私達にも属さないものを一本持っている。これは当り前のことなのだが、一昔前の時代にはこういう女は決して世間からよくいられない存在だった。生意気だとか、頭が高いとか、男の世界の付属物としてしか女の価値の認められない時代には、なまじ個性は邪魔にこそなれ、当人にとっても生きるのに厄介なものだったのだ。うわべだけのへりくだりや、たよりなげな仕草でひとの同情をひいて、上手に女の世渡りすることも下手な母は、それだけ世間の風当りを強く身に受けてきたといえる。母も欠点の多いひとではあるが、世渡りべたなだけなお損をしている所もあるのだ。そういう意味でよき心のみちびき手であり、又世間の防波堤でもあった父を失ってから、孤独な生き方のなかで、ひたすら自分の道をさぐり茶道に精進したといえよう。そして私はそのことを立派だといいたい。

母は今でもよく本を読み、つれづれに作る俳句も相当の数にのぼっている。真夜中に一人爪弾きで三味線をひいてたのしんだりもする。戦後は世の中が明るく自由になり、天才の未亡人を監視するおせっかいな人間もいなくなり、母は三橋美智也のファンで、私や私の子供が時々母に引き連れられて、日劇などに三橋の歌をききにしかける。私の長女が仕事の関係で、切符はいつもとびきりの席を用意してくれる。そういう時の母は、これがお茶の宗匠かと思うようになってくたくな

く無邪気で面白い。

母が大きな父のかげにすっぱりと身をちぢめて、ひたすら父の未亡人としてのみ生きること、或る人々は望んだかも知れない。しかしこういう要求ほど人間の人間性を無視した勝手な考え方はない。父に對する想いは、他人がとやかく詮索しなくとも、母の心が一番深くそのことを知っている。小さくとも生命を得てこの世に誕生した一人の人間である母が、父の妻であると同時に母の道を切り開き、精いっぱい自分の花を咲かせることは、立派なことである。母もすでに七十才となり、去年はひどい暑さのためにすっかり体を弱らせて七十日間程入院して、われ／＼娘夫婦息子夫婦孫共その他を心配させたが、養生のかいあって今年はすっかり元気である。今後も益々元気で、私達のた



この頃の母（江戸千家清白流六世として）

めによき助言者であってほしい。

私と弟のこと

弟は鎌倉で生れたので、父は鶴ヶ岡八幡宮の氏子ということで鶴之助と命名した。三才の時に父が亡くなったので、ほとんど記憶もないかと思ったら、一緒にお風呂にはいったことだのその他のことを、感覚ではつきり感じるとる覚え方で覚えていたことを知り、親子の不思議な縁の生々しさに、私は思わず涙ぐんだ。弟も父の晩年の歳に近くなり、目方も二十何貫かあり父にそっくりになった。忙がしい仕事のあ



四十年振りで再会したお松さん（村越松像のモデル）と私（左）

いまに、岸田吟香のことをコツコツ調べている。日本女子大出身の時子という好伴侶を得て一男をもうけ、祖父吟香から一字貰って香太郎と名付けている。

私も自分の子供―私には三人の子供がある。長女は文絵といい、学校を出て勤めている。次女は夏子といい、芸大油絵科の四年である。

はじめての子供には欲張って、文でも絵でも才能豊かな子供でありますようにという思いをこめて、文絵と命名し、次の子供は樋口一葉の本名にあやかり、また夏生れたので、四季のうちで最も盛んな感じのする夏が、この子の象徴となるようにというわけで夏子と命名し、高校二年の長男は、丁度終戦の年の四月生れで、どうぞ命だけは無事に生き延びてくれるようにという祈りをこめ、又もう一つ劉生の「生」をおいちゃまから頂いて、両方の意味をこめて生郎と命名した。この子はどうかや音楽を自分の進む道ときめているようである。

私は終戦後夫幸四郎と再婚し、苦しい時期を小さい子供をかかえて夫と共にのり切って来た今、つつがなく成長した我子を前にして、私達夫婦は夫婦なりの感慨がある。

子供達が大きくなるにつれて、私はその子供の中に自分の若い日の姿を見ることが多くなってきた。そして今さらに母のことを思う。母と自分と子供達と、この三代を思うと人生は実に豊富な感じである。

苦しみが多くても、その中に宝石のようにキラリと光る幸福感、その輝きをみた時生きがいを感じ、喜びの感情を知ることができる。そしてそれが人生の幸福というものである。キラリと光る幸福は、ひとそれぞれにちがうであろうが、苦しみの中で一点美しく輝くダイヤの

ような幸福は、誰にでもあるものだと思う。

情 愛 の 手 紙

鶴沼に住んでいた頃、母は重い大腸カタルを患って、伊豆の長岡温泉にしばらく養生に行ったことがあった。その時の父と母の手紙をここにのせて、その頃の父と母との姿を偲びたいと思う。

……お前がいなくてどうも淋しい。何してもはり合いがない気がして弱る。函をかいても不図、何となく淋しいつまらぬ気がして来る。そうするとあそこは養いがいいのだナと思う。家の中に火が消えた様だ。早く丈夫になって帰って来る様に。しかし無理して早く帰る事はない。只そう云うだけなのだ。十七日に帰る事にするのがいいと思う。十六日にやはり麗子をつれて遊びに行く。麗子は朝夕僕のそばにおいておく事にしている。昼は寒いから画室に入れて遊ばせておく。わきで仕事しているのだ。今日二十通近くの手紙かいたのでもうつかれた。麗子ハ今僕のそばで函をかくと云っている。麗子のおこづけをかく。

アノネ、オテサゲヤナンカヲ ハナ（女中さんの名前・麗子註）ガクレマシタカ、（小包で送った事を云っているのだ）

アノネ、ソイカラネ オンセンノオフロハ ヨゴザンスカ ソイカラネ、オビヨウキヨクナリマシタカ、ソイカラネ、ネ、アノネ、アノネ、オウチノホウガヨゴザンスカ、

オンセンノホウガヨゴザンスカツテカクノ、ソイカラネ、ソレカラ

ネ、アノネ オウチデマフテイマス ソイデアッチノホウカラ オビヨウキナオリマシタツテ オテガミガキタラドウデショウ、ソイカラネ、アノネ、ゴシンバイアリマセンカツテカクノ、ケケケケケ、（これは笑う）

それでハ又。これから又めしを食ってやすむ、少し風邪気だが用心深くしているから大丈夫だ。家の事や金の事ハ安心している様に。又しばらく手紙が恋しい間になったネ

二月十日夜認む

劉生

葵どの

……足が思うようにまだききませんから足さえなかったら、食養生の方はうちの方がはるかによろしいと思います。……いらつしやる日はつきりしましたらあの別荘の方を（麗子のこと・麗子註）空いて居たら頼んで置きましょうか？ あなたの御手紙はほんとに情が深くて恥かしい気がします。ほんとによくどんなに深く私を愛して居て下さるかまるですっかりわかります。

麗子に、

麗子ちゃんのお手紙は、母様をどんなによろこばせたかわかりませんよ。母さまのあんよは、だん／＼なおって来ましたよ。御手さげは郵便やさんがくれました。早くなおりました。お父ちゃまと御一所に御むかえに来て下さいね。又おんせんのおふろに還入りました。お母さまは、おんせんよりどこより御うちが一番大好きです。……

二月十三日

しげる

劉生さま

川戸まつさんのお話

◎会員有田さんとの対話より

注. 川戸マツさんは岸田劉生の作品「娘於松之像」のモデル。

- 川戸さんは、現在、藤沢在住。 84才。
- 7才か8才頃からモデルを始めた。
- 母が岸田家の手伝いをしていたので、母といっしょに出入りをし、麗子と友達になり、モデルをすることになった。
- 光線の具合があるので、毎日、同じ時間にモデルをしていた。同じ方向をむいている絵が多いが、いつも窓からの光線の具合で、“高砂”（地名）の方向にむかった同じ場所でモデルをした。
- 普段はとてもやさしくて、「おじさん、おじさん」と呼んでいたが、モデルをしているときは、とても厳しかった。
- ショールをかけている絵が多いけれど、あれは私のもので、松網みがとても先生の気に入って、使われた。その後、自分の手には戻って来なかった。
- 劉生は相撲が好きで、庭に土俵を作って書生さんとよくとっていた。
- 絵の髪型の「いちょうまわし」母が大事に結ってくれたもので、当時は結っている人がいなかっただったので、劉生が珍しがってモデルにしたのではないかと思う。

劉生絵日記より

1月15日(日) 晴 (大正11年)

今日は晴、雪は近年にない大雪だったらしい。風邪気味で寒気がするので、一時過ぎ迄床の中で新聞や、娯楽世界(昨日かった)をよんでゐて、ともかくおきる。昼食をうまくたべ、三日分の日記をつける。藁も風邪気だと云ってねている。寒いのでいけない。麗子はお松ちゃん正ちゃんがお松の御ふくろが女中が宿りに行ってゐるので手つだひに来てゐるので一緒について来たのと遊んでいる。玄関へ座っておひな様ごっこだと云って、着物の裾をおひめ様の十二ひとへの様にして坐ったり正ちゃんが刀(エモン竹)をさして坐ったりしてゐる。雪のにはをみてはクリスマスを思ったのか松にいろいろおもちゃをぶらさげたりしている。手紙の返事かく。兵庫県中学の新井君に図畫教育の返事もかく。これもしそがしくてかけなかったの打がかいてほっとする。

— 原文通り —

大 白 鳥

逸見千鶴子

くぐいぬま 松嶺・潮騒の別天地

劉生蘇生し たぐいなき画業達成

三十八才の命惜しかり

六年半の鶴沼に翔つ大白鳥

油のり 麗子・於松の連作多数

会心の笑みもて画筆揮えり

懸命にモデルの苦痛堪えにつつ

幼き麗子父をたすけぬ

凝視のはて子の魂を掴みとり

麗子となせり久遠の乙女と

ふた親の溺愛の家羨ましみて

末弟正吾入りびたりたる

麗子 正吾 於松 それぞれ扮装したる男雛女雛を

劉生は日記に

大震災 家傾けば移りゆき

この天才画家に悲運兆せり

「鵠沼」第72号
平成7年5月30日発行

鵠沼の想出
岸田麗子の思い出
江ノ島の地層と史跡

ご注意：本紙（機関紙）の文
章を引用される方は、必ず
出典を明記して下さい。

編集・発行 鵠沼を語る会

鵠 沼 公 民 館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34